異世界で新生活～面倒くさがりな青年～

朧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界で新生活～面倒くさがりな青年～

【Ｎコード】
Ｎ４７５７Ｕ

【作者名】
朧

【あらすじ】
目が覚めたらジャングルだった。
だが勿論、彼にはジャングルで寝た覚えなど無い。
どうしようかと悩んでいたとき、空から落ちてきた神と名乗るものからの手紙で知るのだった。
この小説は、完全な思いつきで書いたものです。
更新も作者の気が向いたときに更新します。
気長に待てる人だけどうぞ。

プロローグ（前書き）

この小説は完全に思いつきで書いたものです。
クオリティは期待しないで下さい。
私の気分で更新します。

プロローグ

俺は生まれてから、ごく平凡な人生を歩んできた。

小学校、中学校と進み、高校も自宅から近いという理由で選んだ。

そして、専門学校に進み１人暮らしを始めた。

その間も何事もなく過ごし、無事に専門学校を卒業。

そして、就職。

何の変哲も無い、平凡な。

平凡すぎる人生に飽き飽きしていた。

非常に退屈な毎日を過ごしていた。

極めつけは、自分自身が面倒くさがり屋な点だ。

この性格が、平凡な人生を続けさせていたのではないかと思う。

そんな時、事故に遭った。

居眠り運転していた１０ｔトラックが、信号待ちしていたとき突っ込んできた。

死を迎えた人間は、まったく無の存在になると考えている俺。

感情は勿論、何も感じることの無い無の存在。

それが死だ。

だから、幽霊とかは信じていない。

自分が体験したなら別だが。

１０ｔトラックに衝突したら、死は免れないだろう。

これで、退屈な人生とはおさらばだ。

俺の意識は途切れた。

第1話　では、早速（前書き）

基本的には、主人公の1人称で進んでいきます。

次の更新は、いつか。

私にも分かりません

第1話　では、早速

ふむ、ここで素朴かつ当然の疑問をぶつけさせてもらおうか。

さて、ここはどこだ。

周りを見渡してみれば、一面ジャングルである。

いつの間に俺は、アマゾンに来たんだよ。

だが生憎と、来た覚えも無ければ行こうと試みた覚えもない。

さて、どうするかと悩んでいると、空から何かが落ちてきた。

手紙か？

封を切り、二つ折りされて入っていた紙を取り出し読んでみる。

〔これは神からの手紙です。心して聞くように〕

神って・・・・。

〔残念ですが、あなたは１０ｔトラックによってスプラッタにされてしまいました〕

それは、さぞかしグロイ光景だっただろうな。

〔本来ならそのまま、天国なり地獄なりに行くのですが。私の気まぐれで、異世界に送ってあげましょう〕

え～っ・・・・。

余計なお世話だな、おい。

めんどくせぇ・・・・・。

別にたいした未練も無かったのに。

つうか、自分が死んだということをナチュラルに受け入れてる自分に、ちょっと驚きだ。

〔ですが、送った異世界は魔法あり、魔物ありのファンタジー世界です。なので、ちょっとした能力をプレゼントします〕

ふーん、って感じだよ。

〔まずは、魔力底無し。身体能力は、普通の人間を3としたら、あなたは7くらいです。ウ○○ン・○ルトも真っ青な速さで走れます〕

それはもう、人間じゃないだろう。

〔さらに、何でも創造能力。念じたものが何でも造れます。ただし、自分より大きいものは無理です〕

さすがに制限は付くよな。

当然か。

〔あとは、テ○○ズシリーズの術などが自由自在に使えます。威力

は、はっ？ってくらいだけど。あとＦＦも。最後に、何でも無限成長能力。その名の通り、鍛錬すればするほど上達します。際限なしです。って言っても、今の時点でもヤバいんだけどね〕

チートだな。

どう考えてもチートだ。

〔最後に、あなたが今いるジャングルは魔物がうようよ居る場所です。ヒントとして、北に２０ベル行けば街です。１ベルが１ｋｍです。じゃ、自由に行きなさい〕

自由に行きなさいと言われてもな。

まあ、とにかく街に行ってみるか。

立ち上がり、身体を伸ばしてみる。

今気付いたが、俺の格好は全身黒ずくめだよ。

黒のシャツに黒のズボン。

極めつけは、膝下まである黒のコートだ。

目立たないか？この格好。

黒好きだからいいか。

ふと、後ろから熱烈な視線を感じる。

「・・・・」

後ろを振り返ってみると、狼みたいな魔物――になるのだろう――が涎を有り得ないくらい垂らしながら、俺を凝視していた。

「オー、マイガッ・・・・」

俺は正面を向くと、最高のスタートダッシュを切る。

走ってみると、神からの手紙に書いていた通り有り得ないスピードが出ている。

狼たちを見る見るうちに突き離していく。

このまま逃げようかと思ったが、ちょっと闘ってみようかなという衝動に駆られる。

「（こんな世界だ。ヘタしたら、人間を殺すことになる可能性も０じゃない。まずは魔物を殺して、少しでも『殺す』ことに慣れておいた方がいいか。ってことは、殺す方法は・・・）」

俺は急停止を掛けて振り向くと、創造能力で長刀を創造する。

ご承知の通り、セフ○○ス愛用の刀である。

命名、『正宗』。

幸いなことに、今の時点でもヤバいらしいので、何とかなるだろう。

最悪の場合は、魔法か。

やっと追い付いてきた狼が、俺を見つけると涎を撒き散らしながら飛びかかって来る。

「ふっ！」

俺が『正宗』を振るうと、４体居た狼がバラバラになった。

おや？

俺は１回しか振ってないんだがな。

・・・まぁ、いいや。

次の敵には魔法を試してみるか。

さて、先進むべ。

俺が再び走り出すと、すぐにジャングルを抜けて街道に出た。

「抜けたか。北は・・・あっちだよな」

北へと身体を向けると、ゆっくりと歩いていく。

まぁ、別に急いでないし。

夜までに着けばいいでしょ。

今は、太陽の位置は真上だ。

前住んでいた地球基準で考えるのはダメかもしれないが、まぁ大丈夫だろう。

そんなに差は無いと思うし。

ただの勘だ。

ちなみに、さっき出した『正宗』は閉まっておいた。

これまた創造能力で創りだした、物を収納できる指輪だ。

収納限度は無い。

どこぞの猫型ロボットだ。

まあ、そんなこんなで街道を歩いていると、この世界に来たことで異常に発達した視覚と聴覚、嗅覚が異常を察知した。

視覚では、前方数ｋｍで馬車を襲っている魔物御一行を捉える。

聴覚では、魔物の奇声や怒号。

嗅覚は、血の臭いを捉えた。

「（めんどくさっ・・・！間違いなく、フラグでしょ）」

溜め息を吐きながら、もう一度前方へと目を凝らす。

見えたのは、何やら豪勢な鎧を着た騎士のような人間――だと思う――が数人。

「（騎士、か？つうことは、あいつらは要人の護衛中ってことか？てっきり商人か何かだと思ってたが、よく見たらちょっと豪勢な馬車だな。じゃあ、あの馬車に乗るのは国でも高い地位に居る人間か）」

何となくの状況を理解すると、元から無かったやる気がマイナスを突破する。

「どうしよう・・・・。魔物の方は、さっきの狼か。それと、俗に言うゴブリンってやつか？」

１６０ほどの身長に、全身が緑の姿をした二足歩行の魔物。

「それに、心なしか狼も俺が倒したのよりも大きいような・・・」

「ワオーン！」

ん？

いきなり狼が吠えたな。

って、あら？

いつの間にか俺、ロックオンされてる？

考えながら、どんどん近付いていたのか？

魔物もまだ状況が読みこめていないのか、硬直中である。

「（・・・バレたらしょうがない。先手必勝）」

『正宗』を出そうかとも思ったが、魔法を試すことを思い出し中断する。

「フリーズランサー」

俺がそう呟くと同時に、氷柱が間断無く放たれ魔物を串刺しにしていく。

「シネェ！」

どうやら取りこぼしのゴブリンが居たようだ。

俺がゴブリンの振り下ろした太い棍棒をを上体を引くだけで避けると、俺はゴブリンの顔の前に掌を向ける。

「ファイア」

掌から放たれた炎が、ゴブリンを焼き尽くす。

あっという間に、ゴブリンは炭化してしまった。

「（ファイアの威力じゃないな。これでファイガとか使ったら、どうなるんだろうか）」

内心、自分の魔法の威力に驚いていると、再び視線を感じる。

「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」

騎士の方々からの視線だ。

「えーと・・・・・・。ナース」

最後の情けで、傷付いていた騎士の方々の傷をナースで治すと、地平線の遠くに見える米粒ほどの街に向かって駆け出した。

後ろで何か叫んでいるが、聞こえません。

それから数分で、俺は街に到着した。

騎士　ｓｉｄｅ

くっ、不覚だ！

サラヴェリア王国王都ラクディルまで、後数十分もすれば到着というところまで来て、魔物に襲撃されるとは。

私たちはサラヴェリア王国近衛騎士団の人間で、私は近衛騎士団副団長ラフィーナ・エルフロン。

そして、馬車に乗っているのはサラヴェリア王国第２王女イリアス・ゼリア・ヴェリア様だ。

隣国のラフトブルク連合王国との友好を深めるという名目で行われた舞踏会の帰りだ。

襲って来たのはベアウルフ8体に、ゴブリン１０体。

近衛騎士団の護衛は１０人。

普段ならば、ベアウルフやゴブリンなど敵では無い。

だが、やはり数の暴力には勝てん。

ベアウルフの素早い動きと、ゴブリンの人間を上回る腕力。

半分以下まで何とか減らしたが、このままでは厳しいところまで来ている。

そんな時、突然1体のベアウルフが私たちとは別の方向を向いて、鳴き声を上げた。

思わず私も、そちらへと視線を移してみると、上から下まで黒で統一した服装に身を包んだ少年――青年か？――が立っていた。

何となくだが、しまった！という顔をしている。

マズイ！

ただでさえ押されている状況だ。

これ以上、護る対象が増えれば！

早く逃げろ！

そう言おうとした時、私の目の前を氷柱が何本も通過する。

この氷柱によって、残っていた魔物は残らず絶命した。

再び彼へと視線を戻したとき、ゴブリンが襲いかかっているところだった。

だが、彼は体捌きだけで避けると、ゴブリンに再び魔法を放ち撃退した。

驚くことに、ゴブリンはあっという間に炭化してしまった。

騎士団の人間でも、あんな威力を持った魔術師はいないぞ。

だが、何はともあれ助かった。

礼を述べようとすると、彼は物凄いスピードで走って行ってしまった。

は、速い・・・・・。

走り去って行った彼の姿を見送っていると、不思議なことに気付いた。

何と、私を含めた人間の傷が綺麗に治っているのだ。

体力も多少だが回復している。

何者だったのだろうか、彼は。

だが、彼の走り去った方角は私たちの目的地と同じ。

ならば、いつしか会うこともあるやもしれん。

彼と会える日々を楽しみにしながら、再び馬車を出発させる。

そういえば、イリアス様がやけにお静かだ。

馬車の中を覗いてみると、魔物を見たせいか気絶していた。

・・・まあ、いいだろう。

このまま寝かせておこう。

騎士　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第2話　豚が二足歩行だと！？

街の前まで来てみると、街はでかい城壁で囲まれていた。

モンスター対策か。

それに、何となく街の周りに何かあるような感じがするんだが。

まあ、いっか。

先に進むか。

門があり、そこでは簡単な身分のチェックが行われるらしい。

ちょっとマズイか？

こういうときこそ、『何でも創造能力』を使うべし。

これの能力で、この世界の身分証を創造。

職業は何にするか。

・・・傭兵でいいか。

じゃ、作成。

完成したものを見てみると、現代の免許証みたいだな。

それはさておき、自分の番がきて身分証を見せる。

「ふむ、傭兵か。ランクは？どこから来たんだ？」

ランクか。

傭兵が集まった組合みたいなものがあるのか？

まあ、ここは無難に行こうか。

「まだ駆け出しの傭兵で、遠い東からやってきました」

「東？東って言ったら、技術国家ジャポールがあったな」

ここでの日本的な国か？

まあ、適当に話をあわせとくか。

「ええ、そうです」

「そうか。ここ王都ラクディルにも【傭兵ギルド】はあるから、行ってみるといい」

兵に礼を告げ、俺は街の中へと足を踏み入れた。

それにしても、ここは王都なのか。

どうりで、遠くに城が見えるはずだよ。

つうことは、さっきの団体もここに来るんだよな。

進路的にここしかないだろうし。

・・・今の格好、目立つからな。

チェンジしとくか。

俺は物陰に隠れると、再び『何でも創造能力』で服を創造することにした。

いい加減、『何でも創造能力』って言いにくいな。

『クリエイト』でいいや。

安直だけど。

それより、創造したのは某暗殺者のアル○イルが着ていた奴だ。

着ていた服は、『クリエイト』で創造した『何でも収納指輪』。

制限無し。

これも名前付けるか。

『ストレージ・リング』。

これまた安直。

分かりやすくていいだろう。

まあとにかく、着ていた服は『ストレージ・リング』に収納。

そして、新しく着ている服のフードを深く被る。

これで、顔はほとんど隠れる。
見えるのは口と、ギリで鼻か？

さて、まずは情報収集と行きましょうか。
情報は大事だからな。
酒場みたいなところがいいだろう。
金が無いな。
・・・・・何とかなるだろ。
それっぽい店を見つけ、中に入ってみる。
「いらっしゃいませー」
店に入ると、少女の元気な声に出迎えられる。
栗色の髪に、琥珀の瞳。
この店の看板娘と言ったところか。
俺は隅に座ると、すぐに少女が近付いてくる。

「ご注文は何にしますか？」
「任せる。適当に持ってきてくれ」
「かしこまりましたー」

俺は椅子に背を預け、周囲の人間の会話に耳を傾けることにした。

「おい、聞いたかよ。隣国が軍備を始めてるってよ」
「マジかよ？隣国って言ったら、軍事国家のアルカザス帝国だろ？何で急に」
「聞いた話だと、近いうちにどっかと戦争仕掛ける気らしいぞ」
「そしたら、かなり金が動くな。食料に武器、商人が動くぞ」

戦争、ね。

穏やかな話じゃないな。

「お待たせしましたー」

俺は少女が持ってきた麺類をすする。

パスタにしか見えんが、美味いからいいか。

パスタ（？）を食べつつ、再び周りの会話に耳を集中させる。

「西の多民族国家ラフィードで、内乱が起きたらしいぞ」
「ああ、俺も聞いた。それに、あの国には前から内乱の兆しはあったからな。元々は、一番の勢力を持ってたアルガロ族が力で統一した国だろ？」
「かなり血が流れたって聞くからな。詳しくは知らないが、統一から未だにアルガロ族が国を牛耳ってるって噂だ。協力した部族でさ

えも、たいした扱いは受けてないとか」
「まあ、それは反乱が起きて当然かもしれねぇな」
今度は内乱か。
この世界は、俺が思っている以上にデンジャラスらしい。

さて、問題は金がないのに飯を食っちまった俺だ。
さすがに逃げるのはどうかと思うしなぁ。
「おらぁ！！ドン様が来てやったぞ」
・・・・すげぇ、豚が二足歩行してるぞ。
突然変異か？
しかも、人語を話すとは。
えらい知能の高い豚だな。
「ちっ！またあいつだよ、ちょっと強いからって偉そうにしやがって」
あの豚を知っているらしいな。
いや、待て。

驚くのはそこじゃないだろ。

豚が喋り、二足歩行しているところを驚くべきだろ。

「黙って聞いてたら、すき放題言いやがって！！そこのガキ！！」

何かキレてるな。

しかし、俺にはそんな暇は無い。

それに、俺は無銭飲食するかしないかの瀬戸際なのだ。

俺は虚空に目を向けて、再び考える。

「シカトしてんじゃねぇぞ、コラ！！」

うるせぇな、しかし。

雑音としか言えない声だな。

というか、豚に声帯ってあるのか？

「おい、兄ちゃん！おい！」

「俺か？」

「ああ、あんただよ！あんた、さっきから言ってることが口に出てるぞ！」

「えっ、マジで？」

俺は再び豚へと視線を移すと、顔を真っ赤にしていた。

「これは、すまなかった」

俺はそれだけ言うと、再び考え始める。

さて、どうしたのものか。

ここで手伝うか？

それとも、『クリエイト』で何か創って、それをやるか？

でもなぁ、こういうことはあんまりしたくないし。

ドォン！！

その瞬間、俺はその場を離れた。

すると、さっきまで俺がいた場所の壁に穴が開いちまったよ。

しーらね。

弁償だな。

「おいおい、何すんだよ」

「てめぇ、俺が誰だか知らねぇようだな」

「知ってるさ。突然変異した、喋る豚だろ？」

「！！」

あら、怒っちゃった？

違うのか？

その顔で、その体格。

どう見ても、豚にしか見えないんだが。

「俺を舐めやがって！！ぶっ殺してやる！！」

いやー、それは勘弁。

まだ死にたくないし。

豚は、男が持ってきた大槌を手にすると、俺に向かって振り下ろしてきた。

俺は『ストレージ・リング』から、『正宗』を取り出すと大槌を受け止める。

「ば、バカな！！受け止めただと！！？」

さて、ここで紹介しておこう。

俺は、我慢ならないことがいくつかある。

１つは、無駄な事。

１つは、自分が納得していないのに時間をとられること。

１つは、無駄な労力。

ん？

何か、３つとも微妙に同じか？

まあ、いいや。

とにかく、こいつの行動は俺の３つの定理に違反した。

ということで・・・・。

潰す！

俺は『正宗』で大槌を押し返すと、攻めに転じる。

地を蹴り跳躍すると、蹴りが豚の側頭部に命中。

豚は、外に向かって吹っ飛んでいった。

ここでやったら、店がやばいからな。

俺は『正宗』を肩で叩きながら外へと歩いていくと、丁度豚が起きたところだった。

頑丈だな、おい。

「てめぇ！もう許さねぇ！！ぶっ殺してやる！！」

それしか言えねぇのかよ。

豚はドスドスと言った音を響かせながら、俺に突進してくる。

豚より遅いぞ。

俺は振り下ろされた大槌を避けると、豚の顔面に膝蹴りを喰らわせる。

何か変な音がしたから、鼻の骨が折れたかな？

俺は『正宗』を収納すると、数本のナイフを創造。

またバカみたいに突っ込んできた、豚の各所にナイフを刺す。

まずは両手首、アキレス腱、最後に脊髄。

前世では、興味本位で医療関係の本も読んでたからな。

大体の場所はわかる。

それに、いろんな格闘技もやってたし。

暇潰しに。

どうやら、ナイフが効いたようだな。

喚きながら倒れた。

そして、部下みたいな男が連れて行った。

よくあんな豚を運べるな。

凄い力だ。

「何の騒ぎだ！」

突然の凛とした声に振り返ってみると、1人の騎士が立っていた。

街道で助けた、あの騎士だ。

めんどくさいことになりそうだな。

はぁ・・・・・。

第2話　豚が二足歩行だと！？（後書き）

何だこれ。

ひどいのは承知しています。

気が向いたので、書いてみただけです。

そのうち、全部改訂するかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4757u/

異世界で新生活～面倒くさがりな青年～

2011年10月8日04時40分発行